様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月　２ 日現在

機関番号：１２５０１
研究種目：若手研究
研究期間：2019～2021
課題番号：１９Ｋ１４０８９

研究課題名（和文）動員としての教育―クリティカル・ペダゴジーの新展開―

研究課題名（英文）Critical Pedagogy as an Educational Theory of Mobilization

研究代表者
市川　秀之（Ichikawa, Hideyuki）

千葉大学・教育学部・准教授

研究者番号：７０７３３２２８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、動員の民主主義教育論としてクリティカル・ペダゴジーを解釈することを目指した。具体的には、歴史の記憶によって動員を行おうとしていること、それがクリティカル・ペダゴジーが依拠するラディカル・デモクラシーと接続しうることを明らかにした。また、動員の対象となる学習者が、抵抗する主体となりうるために求められる理路について、精神分析に依拠してパウロ・フレイレの論を読解している研究を用いて明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究課題の成果が有する最大の意義は、クリティカル・ペダゴジーが傾向として有していた動員の内実を詳細に探究し、これまで当該分野で十分に検討されてこなかったこの概念を組み込んだ上で、民主主義教育論を提示した点である。これは、熟議民主主義論などのはじめとする、理性的主体による合理的行為を念頭に置いたものとは別の民主主義教育論を提示し、多様な民主主義教育実践を解釈・開発するための視点を整備したという点において、学術的にも社会的にも意義があるものと考えられる。

研究成果の概要（英文）： The aim of this research is to construct critical pedagogy as a theory of democratic education in terms of mobilization. First, I clarified how critical pedagogy tried to mobilize people by examining the concept of historical memory. Second, I explicated how learners became resistant subjects by drawing on the research which examined Paulo Freire's theory through the lens of psychoanalysis.

研究分野：教育哲学

キーワード：クリティカル・ペダゴジー　動員　民主主義　エージェンシー

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

クリティカル・ペダゴジーは、人種やジェンダー、経済等に起因する多様な抑圧的状況に人々が異議を申し立て、より自由かつ平等で、正義に適った民主主義社会をつくるよう促すことを目指す理論／実践である。クリティカル・ペダゴジーは多様な展開を見せているが、ヘンリー・ジルーに代表される流れに属するものは、ポスト・マルクス主義の民主主義論であるラディカル・デモクラシー、およびパウロ・フレイレの教育理論／実践に依拠している。

近年の研究では、怒りなどの情動、および希望やユートピアという概念に着目し、クリティカル・ペダゴジーにおける教育にあり方を解釈しようとする研究がある（例えば Michalinos Zembylas (2007) *Five Pedagogies, Thousand Possibilities: Struggling for Hope and Transformation in Education,* Brill）一連の研究は、理性中心主義的であると批判されることがあったジルー的なクリティカル・ペダゴジーを修正し、理論的に発展させることを可能としている。

しかしながら先行研究では、とりわけポストモダニズムの受容以降、普遍的かつ絶対的な原理を遠ざけてきたクリティカル・ペダゴジーが情動や希望、ユートピアを重視する場合、それが目指す民主主義社会に適合する規範をどこから調達するのかについての説明が十分だと考えられる。この説明がない限り、教育者によるはたらきかけが扇動と同一視され、学習者が自ら思考し、行動する契機を摘み取ってしまう危険性を、クリティカル・ペダゴジーは抱え続けることとなる。

以上を踏まえ、情動や希望、ユートピアなどがもたらす影響を踏まえつつ、民主主義教育論としてクリティカル・ペダゴジーをどのように理論化することができるのかが、本研究課題において探究するべき最も大きなテーマとなった。

２．研究の目的

上記の背景を踏まえ、本研究課題では、動員の民主主義教育論としてクリティカル・ペダゴジーを解釈することを目的とした。人々の情動を揺り動かし、特定の方向へと導こうとする動員は一見、民主主義とはかけ離れているように考えられる。しかし、動員が民主主義と関係するという政治学の知見を踏まえると（例えば山本圭（2016）『不審者のデモクラシー』岩波書店など）を踏まえると、この概念からクリティカル・ペダゴジーを解釈することは、決して不可能ではないという結論に至った。そこで、本研究課題の目的を上記のものとし、研究を進めることとした。

３．研究の方法

本研究課題では大きく分けて二つの事柄に着目し、全て文献の読解によって研究を進めることとした。

A

クリティカル・ペダゴジーでは、普遍的な基盤を欠いた後でもなお、特定の規範を教育者が掲げることが積極的に肯定されている。研究代表者はかつて、クリティカル・ペダゴジー

をポスト基礎付け主義という観点から解釈することが可能であるという見立てを概略的に示唆していたが（市川秀之（2016）「クリティカル・ペダゴジーにおける規範」『日本デューイ学会紀要』第 57 号、43-52 頁）、これをより詳細かつ十全に展開した上で、フレイレやヘンリー・ジルーの教育論を解釈することとした。

この見立てを採用すると、ポスト基礎付け主義的なクリティカル・ペダゴジーはどこから基礎を用意するのかという疑問が生じる。研究代表者は、信仰の観点から規範の構築を描こうとしたことがあったものの（市川「クリティカル・ペダゴジーにおける規範」）、信仰をするためのものそれ自体については十分に論じてはいなかった。本研究課題ではこの点を意識し、規範が内在された希望やユートピアの源泉をクリティカル・ペダゴジーではどこから得ようとしているのかについて、パウロ・フレイレの著作に加え、当該分野の代表的な論者であるヘンリー・ジルーの著作を系譜的に読解することで探究した。

次に、この探究で得ることができた結果を、ジルーらが依拠するラディカル・デモクラシーと接続させることした。これにより、教育・動員・民主主義の関係を整理して描き出すことを企図した。

B

A の作業によって理論的な基盤が整備された後で残る問題は、能動的に行為する能力としてのエージェンシーの担保である。クリティカル・ペダゴジーでは、抑圧的な状況に抗して学習者が考え、抵抗するようになることを目指しているが、動員はその学習者のエージェンシーを妨げる場合がある。この危険を見据えつつ、いかにしてエージェンシーを発揮するための理路を確保するのかが、本研究課題においては極めて探究の対象となった。

研究代表者は以前、教育者のはたらきかけの観点からこの問いに応答したことがあるが（市川秀之（2018）「クリティカル・ペダゴジーの美的側面」『日本デューイ学会紀要』第 59 号、101-110 頁）、これは動員という文脈からのものではなかった。加えて、当該の応答では、学習者の側の論理を解明したわけでもなかった。そこで、近年のクリティカル・ペダゴジーの研究において、上記の問題に応え得るものを探して読解し、A と関連させながら研究を進めることとした。

４．研究成果

「研究の方法」で記述した項目に分けて、成果を記述する。

A

「研究の方法」で記したように、フレイレの著作に加え、ヘンリー・ジルーの著作を初期の著作（Henry A. Giroux (1981) *Ideology, Culture, and the Process of Schooling*, Temple University Press）から、研究遂行時の最新のもの（例えば Henry A. Giroux (2018) *American Nightmare: Facing the Challenge of Fascism*, City Light Books）までを系譜的に読解し、彼の論が規範の中身として何を想定しているのかを探った。

その結果、歴史の記憶（historical memory）をジルーが重視していることが明らかとなった。歴史の記憶は、様々な抑圧に抵抗し、民主的な社会をつくりだそうとした運動や人々の思想からつくられている。ジルーはこの歴史の記憶の中に、アメリカにおける進歩主義や新しい社会運動、さらにはフレイレの思想も組み入れ、それを規範の材料として見なしてい

ることが分かった（例えば **Henry A. Giroux (2000)** ***Stealing Innocence: Youth, Corporate Power, and the Politics of Culture,*** **Palgrave**）。ここから、歴史の記憶は、希望を作り上げる際の材料としてクリティカル・ペダゴジーの中で用いられているという解釈を提示した。さらに、歴史の記憶からつくられる希望をラディカル・デモクラシーに節合させることで、クリティカル・ペダゴジーでは動員を取り入れることが可能となると主張した。以上の成果については学会で報告するとともに、論文を執筆した。

B

エージェンシーを担保する理路の確保にあたって、クリティカル・ペダゴジーの主体論をフレイレのものに代表させ、それを精神分析の観点から読み解く研究に着目した（**Kevin J.** Holohan（2017）"Identification, Language, and Subjectivity: Rereading Freire **through/agai**nst Lacan," ***Curriculum Inquiry*** **47 (5), pp. 446-464**、**Alex J, Armonda (2022)** "Freire and Lacan: Critical Pedagogy as a Radical Methodology of the Subject," ***Review of Education, Pedagogy, and Cultural Studies*** **44(2), pp. 121-146**）。

その結果、フレイレの系譜にあるクリティカル・ペダゴジーの主体論（ジルーのものも含む）には、人間は意識によって自己を統御することが可能であるという前提が存在していると考えられることを明らかにした。これを修正した上で主体を語り直すことで、エージェンシーを担保することができると判断し、作業を進めた。具体的に進めた作業は、無意識の捉え直しと、それを踏まえた上での変革可能性のための論理の整備（ジャック・ラカンの論を背景とした、幻想の横断の観点からの意識化概念の捉え直し）であった。

エージェンシーの理論的担保のためのこうした探究はまた、クリティカル・ペダゴジーをラカン左派（**Yannis Stavrakakis (2007)** ***The Lacanian Left: Psychoanalysis, Theory, Politics.*** **Edinburgh University Press**＝ヤニス・スタヴラカキス（**2017**）『ラカニアン・レフト――ラカン派精神分析と政治理論』山本圭、松本卓也訳、岩波書店）の教育理論として位置付けうる可能性を有していることが分かった。以上の成果については学会で報告するとともに、論文（**2022** 年 **5** 月現在、審査中）を執筆した。

A および **B** に記された成果を通して、動員の民主主義教育論としてクリティカル・ペダゴジーを解釈することが可能となった。今後の課題としては、この解釈における教育者の存在についての考察に加え、具体的な実践を分析した上での理論の見直し等を挙げることができる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計8件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 Ichikawa Hideyuki	４．巻 54(4)
２．論文標題 A theory of hope in critical pedagogy: An interpretation of Henry Giroux	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Educational Philosophy and Theory	６．最初と最後の頁 384～394
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/00131857.2020.1840973	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 市川 秀之	４．巻 29
２．論文標題 【書評】橋本憲幸著『教育と他者―非対称性の倫理に向けてー』	５．発行年 2020年
３．雑誌名 近代教育フォーラム	６．最初と最後の頁 192-195
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 市川 秀之	４．巻 87(3)
２．論文標題 【書評】時津啓著『参加型メディア教育の理論と実践―バッキンガムによるメディア制作教育論の新たな展開をめざして』	５．発行年 2020年
３．雑誌名 教育学研究	６．最初と最後の頁 409-411
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11555/kyoiku.87.3_409	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 市川 秀之	４．巻 122
２．論文標題 【書評】加賀裕郎著『民主主義の哲学―デューイ思想の形成と展開』	５．発行年 2020年
３．雑誌名 教育哲学研究	６．最初と最後の頁 78-83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 市川 秀之	4．巻 60(10)
2．論文標題 「普通」をつくり直すために―パウロ・フレイレと道徳授業	5．発行年 2020年
3．雑誌名 道徳教育	6．最初と最後の頁 84-85
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 市川秀之	4．巻 119
2．論文標題 主権者教育と道徳教育	5．発行年 2019年
3．雑誌名 子どもの道徳	6．最初と最後の頁 14-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 市川秀之	4．巻 134
2．論文標題 数値に振り回されない教育のために	5．発行年 2019年
3．雑誌名 教材研究 TOTAL ENGLISH	6．最初と最後の頁 1-1
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 市川秀之	4．巻 60 (4)
2．論文標題 皆でつくり、共に生きる―ジョン・デューイの論から考える道徳教育・道徳授業	5．発行年 2020年
3．雑誌名 道徳教育	6．最初と最後の頁 84-85
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 市川 秀之
2．発表標題 抵抗する主体―クリティカル・ペダゴジーの主体論の構成と展開―
3．学会等名 日本デューイ学会 第64回研究大会
4．発表年 2021年

1．発表者名 市川秀之
2．発表標題 ナショナル・アイデンティティへの動員としての教育とその課題 ―ヘンリー・ジルーのクリティカル・ペダゴジーの検討から
3．学会等名 日本教育学会 第78回大会
4．発表年 2019年

1．発表者名 市川秀之
2．発表標題 何のための深い学びなのか？―ジョン・デューイの思想から考える
3．学会等名 千葉大学教育学部附属中学校 令和元年度公開研究会（招待講演）
4．発表年 2019年

〔図書〕　計3件

1．著者名 日本デューイ学会	4．発行年 2020年
2．出版社 勁草書房	5．総ページ数 340
3．書名 民主主義と教育の再創造	

１．著者名 田畑真一（編著者）、玉手慎太郎（編著者）、山本圭（編著者）、田村哲樹、寺尾範野、市川秀之、生澤繁樹、柿並良佑、大河内泰樹	４．発行年 2019年
２．出版社 勁草書房	５．総ページ数 304
３．書名 政治において正しいとはどういうことか	

１．著者名 貞廣斎子、伊藤英希、鈴木隆司、保坂享、笠井孝久、西村隆徳、吉田浩、真田清貴、伊藤裕志、高木啓、磯邉聡、土田雄一、重栖聡司、大野英彦、渡邉健二、市川秀之、吉田雅巳	４．発行年 2019年
２．出版社 福村出版	５．総ページ数 256
３．書名 新・教育の最新事情〔第3版〕	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関